



インタビューにあたって（インタビューシリーズ： 歴史研究の隣人たち）

古市，晃

(Citation)

Link : 地域・大学・文化 : 神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター年報, 15:56-57

(Issue Date)

2023-12

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100489535>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100489535>



インタビューシリーズ

歴史研究の隣人たち

第4回 ジャーナリスト 中村俊介さん

司会 古市晃
同席 市沢哲・井上舞・吉川圭太



インタビューにあたって

新聞やテレビのニュースなどで報道される発掘調査や古文書の記事がきっかけとなり、歴史に興味・関心を持つようになったという人も多いだろう。一九八二年、飛鳥の山田寺の発掘調査で、七世紀に建てられた回廊が倒壊したままの状態で見えられ、その調査成果が連日のように新聞紙面を賑わせた。当時小学生だった私は、その記事を切り抜いて集めることで古代史への関心を育んでいった記憶がある。

中村俊介さんは、朝日新聞の文化財担当記者として、こうした記事を提供する側の方である。いわゆるマスメディアの一員として、多くの人々に読まれる記事をどのようにして執筆してゆくのか、主に読者として、時に記事の素材を提供する側の人間にとつては、興味のあるところであった。現在、記事はかならずしも紙面で読むものではなく、ネットの配信を通じて目にする機会の方が増えているかもしれないが、いずれにしても、一般の市民が歴史文化遺産に接する機会として、マスメディアの報道記事が圧倒的に多いことは確かだろう。市民の歴史や文化遺産に対する認識が作られる機会として、報道記事の位置づけがきわめて重要であることは、

今さらいうまでもないことかもしれないが、改めて確認しておく必要がある。

インタビューでは、冒頭、中村さんが歴史や文化遺産に関心を持つに至ったきっかけや、新聞社に入社する経緯、さらには通常の記者から文化財の専門記者になってゆく経緯が、配属先での出会いを含めてくわしく語られる。さらには、どのようにしていわゆる特ダネを取材したかのエピソードも明かされている。こうした話題を通じて、私たちは通常、なかなか知ることができない報道記事の作られる過程を垣間見ることが出来るわけだが、一方でそれがバブル経済期の自治体とマスメディアの関係や、歴史文化遺産に対する社会的関心のあり方をよく伝える証言となっていることにも注目したい。

この時期の考古学で進行していた事態として、後に明らかになる旧石器捏造問題がある。一九九〇年代半ばに高校の社会科の非常勤講師を務めていた筆者にとつては、しばらく教科書を手にとらない間に、覚えなくてはならない旧石器時代の遺跡が増えていることとまどいを感じた記憶があるが、こうした問題が引き起こされた背景の一つとして、発掘調査を含む歴史文化遺産に対する社会的関心の高まりがあったことは間違いないだろう。列島における旧石器時代のはじまりがいつからかという問題が、た

んに学術上の課題であるにとどまっていたならば、石器発見が大々的に報道されることもなかっただろうし、教科書に迅速に取り上げられることもなかっただろう。この問題は、学術とマスメディア、さらには社会が歴史に寄せる関心のあり方などの諸問題を集約しているところに大きな特徴があると思うが、インタビューでは、事件に直面して奔走する中村さんの経験が率直に語られる。これもまた、同時代の貴重な証言の一つといえるだろう。

中村さんのお仕事の一つに、世界遺産とそれをめぐる諸問題を取り上げたものがある。世界遺産には、歴史文化遺産と市民という問題に加えて、国際政治という重要な要素も加わるが、インタビューでは、人類普遍的価値に関わる世界遺産と、主に未指定文化財や、市民が大切に思う、いわば「私の町のお宝」との関係が前面に出て、歴史文化遺産固有の価値をめぐる話題となった。話題はさらに日本遺産に及び、歴史文化遺産の保存と、商用を含む活用をめぐる問題に展開している。保存を可とし、活用を問題ありとする二項対立的な捉え方に陥りがちな論点だが、ここではその双方に理解を示す道筋が示されている。こうした点に、専門家と市民をつなぐマスメディアに身を置く中村さんならではの考え方が色濃く表れていると感じる。

新聞自体については、今世紀に入って急速に普及した、ネットの影響をめぐる現状が話題となった。紙の媒体が短期間でこれほど急速に減少することを予測することは、誰にも難しかったに違いない。中村さんは、新聞を旧メディアと呼びつつ、その活路を長年にわたる読者との信頼関係に求めている。このやりとりは、学術上の専門知のあり方をめぐる議論に発展するのだが、いずれにしても、ネットの普及を前提とする社会で、専門知とそれを伝えるメディアのあり方をどう考えてゆくのかという問題は、一昨年のこの企画でインタビューに応じていただいた、新書編集者の山崎比呂志氏のお話にも共通するもので（本誌第一三号）、考えさせられるところが多かった。

話題はこの他にも多岐にわたるが、それに就いては実際に本文をお読みいただきたい。多忙なお仕事の合間を縫ってインタビューにに応じてくださった中村さんに、改めて感謝申し上げます。

（古市晃）